

Absence of zero resonances of massless Dirac operators

相場大佑 (学習院大学)

本講演では, \mathbb{R}^3 上の \mathbb{C}^4 -値関数に作用する次の massless Dirac operator を考える.

$$\begin{aligned} H &:= \alpha \cdot D + Q(x) \\ &:= \sum_{j=1}^4 \alpha_j (-i\partial_{x_j}) + Q(x), \quad x \in \mathbb{R}^3. \end{aligned} \tag{1}$$

ここで, $\alpha = (\alpha_1, \alpha_2, \alpha_3)$ は Dirac 行列:

$$\alpha_j = \begin{pmatrix} \mathbf{0} & \sigma_j \\ \sigma_j & \mathbf{0} \end{pmatrix} \quad j = 1, 2, 3.$$

但し, $\mathbf{0}$ は 2×2 の零行列を表すものとし, σ_j ($j = 1, 2, 3$) は次で定義される Pauli 行列とする.

$$\sigma_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_2 = \begin{pmatrix} 0 & -i \\ i & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}.$$

ポテンシャル $Q(x)$ は 4×4 のエルミート行列値関数であり, 次の条件を満たすとする.

Assumption 1. ある定数 $C > 0$ と $\rho > 1$ が存在して, $Q(x)$ の各成分 $q_{j,k}(x)$ ($j, k = 1, \dots, 4$) は,

$$|q_{j,k}(x)| \leq C \langle x \rangle^{-\rho}, \quad \langle x \rangle := (1 + |x|^2)^{\frac{1}{2}}, \quad x \in \mathbb{R}^3,$$

を満たす.

ここで, massless Dirac 作用素 (1) は電磁場ポテンシャルを持つ Dirac 作用素

$$\alpha \cdot (D - A(x)) + q(x)I_4 \tag{2}$$

の一般化とみることができる. 特に, $q(x) = 0$ の時は,

$$\alpha \cdot (D - A(x)) = \begin{pmatrix} \mathbf{0} & \sigma \cdot (D - A(x)) \\ \sigma \cdot (D - A(x)) & \mathbf{0} \end{pmatrix}$$

と書け, 作用素 $\sigma \cdot (D - A(x))$ は Weyl-Dirac 作用素と呼ばれている.

Definition 2. $f \in L^2(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ が $Hf = 0$ を満たす時, f は H のゼロモードであると言う. また, $f \in L^{2,-3/2}(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ が超関数の意味で $Hf = 0$ を満たす時, f は H のゼロレゾナンスであると言われる.

本講演では次の主結果の証明をする.

Theorem 3. $Q(x)$ は Assumption 1 を満たすとする. $f \in L^{2,-3/2}(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ が超関数の意味で $Hf = 0$ を満たすならば, 任意の $\mu < 1/2$ に対して $\langle x \rangle^\mu f \in H^1(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ が成り立つ. 特に, ゼロレゾナンスが存在しないことが分かる.

Remark 4. $\langle x \rangle^\mu f \in H^1(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$, $\mu < 1/2$ における μ をこれ以上改良することはできない. このことは, Loss-Yau [2] によって構成された Weyl-Dirac 作用素に対するゼロモードを用いることによって示される.

Saiō-Umeda [3] において, 次が証明されている. Assumption 1 において $\rho > 3/2$ とし, ある $0 < s \leq \min\{3/2, \rho - 1\}$ が存在して, $f \in L^{2,-s}(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ が超関数の意味で $Hf = 0$ を満たすならば $f \in H^1(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ が成り立つ. 主結果 Theorem 3 は, この結果において, $f \in L^{2,-s}(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ を, より弱い条件 (特に, $\rho > 1$ に依存していない) $L^{2,-3/2}(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ に, $f \in H^1(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$ を sharp decay estimate $\langle x \rangle^\mu f \in H^1(\mathbb{R}^3, \mathbb{C}^4)$, $\mu < 1/2$ に改良したものになっている.

References

- [1] A. Jensen and T. Kato, Spectral properties of Schrödinger operators and time-decay of the wave functions, *Duke Mathematical Journal*, 46 (1979), 583-611.
- [2] M. Loss and H. T. Yau, Stability of Coulomb Systems with Magnetic Fields III. Zero Energy Bound States of the Pauli Operator. *Communications in Mathematical Physics*, 104 (1986), 283-290.
- [3] Y. Saitō and T. Umeda, The zero modes and zero resonances of massless Dirac operators. *Hokkaido Mathematical Journal*, 37 (2008), 363-388.